平成二十五年四月

故坂神洋次教授追悼記念事業会

発起人
小鹿　一
西川俊夫
内田浩二
青井啓悟
松林嘉克
岡田正弘
近藤竜彦

各位

記

追悼記念事業
一、故坂神洋次教授追悼記念集作成
一、追悼講演会開催

追悼記念事業費
醵金額　一口　五千円（口数はご随意）

追悼講演会
日　時　平成二十五年五月十八日（土）午後一時より
会　場　名古屋大学　理学南館大講堂（坂田・平田ホール）

会　食
日　時　平成二十五年五月十八日（土）午後六時ころより
会　場　名古屋大学　理学南館一階ロビー
会　費　五千円

準備の都合上、誠に勝手ながら、四月二十四日迄に同封の葉書にて追悼講演会・会食への御出欠の程をお知らせくださいますようお願い申し上げます。
ご都合により追悼講演会に御欠席の方でも本趣旨にご賛同いただけます方は、記念事業費の御寄付にご協力いただければ幸甚に存じます。醵金の一部は追悼集の製作に使わせて頂き、ご寄付いただいた方々に配布いたします。なお、記念事業費醵金並びに会食費の振り込みには、同封の振込用紙を御利用下さい。

払込方法
払込期限　平成二十五年五月十日
振込先　郵便振替　口座番号〇〇八三〇-九-一一〇三六九
故坂神洋次教授追悼記念事業会

連絡先　〒四六四-八六〇一　名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院生命農学研究科
応用分子生命科学専攻生命機能化学講座
生理活性物質化学研究分野
小鹿　一
電話　〇五二-七八九-四一一六
E-mail　ojika@agr.nagoya-u.ac.jp

以上

故　坂神洋次教授追悼記念事業　趣意書

謹啓　春暖の候皆様にはますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

さて、坂神洋次先生が昨年の四月九日に逝去されてから、はや一年が経とうとしています。

先生は、昭和二十三年四月二十七日に東京都にてご誕生、昭和四十七年四月に東京大学農学部農芸化学科を卒業後、同大学大学院農学系研究科修士課程に進学され、昭和四十九年三月に同課程を修了されました。昭和五十年十二月に東京大学大学院農学系研究科博士課程を退学後、昭和五十一年一月に東京大学農学部農芸化学科生物有機化学講座の助手に就任されました。助手就任期間中の昭和五十八年九月から六〇年九月までの二年間に渡り、米国の W. Alton Jones Cell Science Center にて研究員として活躍されました。米国から帰国後、昭和六二年六月に名古屋大学農学部農薬化学研究室の助教授に就任されました。平成六年四月からは、丸茂晋吾教授御退官の後を受けて、名古屋大学大学院生命農学研究科応用分子生命科学専攻生命機能化学講座生理活性物質化学研究分野の教授に昇任され、昨年逝去されるまでの十八年間に渡り同研究分野を主宰されました。この間、名古屋大学総長補佐（社会連携・社会貢献担当）、高等研究院副院長、大学院生命農学研究科副研究科長を歴任し、大学運営に多大な貢献をされました。

先生は、学術研究においては一貫してフェロモン・ホルモンなど内因性（内分泌、自己分泌性）生理活性物質の探索研究に傾倒され、多くの業績をあげられました。先生の博士論文の主題となった担子菌 Tremella mesenterica の接合管形成を誘導するペプチド性の性フェロモン tremelogen A-10 はC末端のシステイン残基がファルネシル化された特異な構造を有し、その後の普遍的イソプレノイド化タンパク質の発見の先駆けとなりました。さらに、腸内細菌 Streptococcus faecalis の性フェロモン、枯草菌のクオラムセンシングに必須のフェロモン ComX など、特徴的な構造と生理活性を有する因子の単離に次々と成功されました。さらに、農作物に甚大な被害をもたらす疫病菌の有性生殖のメカニズムの解明にも挑戦し、八十年以上もの間未解明だった交配ホルモンの同定に初めて成功し、疫病菌の繁殖制御への基盤を築かれました。これら微生物の内因性生理活性物質に加え、当時全く例の無かった植物の内因性生理活性ペプチドについての研究にも着手され、アスパラガス培養細胞からペプチド性増殖因子 pytosulfokine を単離するとともにその受容体の同定にも成功されました。この業績は、近年目覚ましい発展を遂げている「植物ペプチドホルモン」という概念確立の端緒となりました。その後もシロイヌナズナを材料として、茎頂分裂組織の維持に重要な役割を果たす MCLV3 や、気孔の分化を誘導する stomagen など、興味深い構造と機能を持つペプチドホルモンを相次いで発見されました。これらの研究のうち、微生物のペプチドフェロモンに関する業績により昭和五十五年三月、日本農芸化学会農芸化学奨励賞を、また植物のペプチドホルモンに関する業績により平成十五年三月には日本農芸化学会賞を受賞されました。

また、この間、学会活動においては、日本農薬学会評議員、同編集委員、植物化学調節学会評議員、同会長、日本農芸化学会評議員、同中部支部長、同二〇〇八年度大会実行委員長などを歴任し、各学会の発展に多大な貢献をされました。さらに、日本学術会議連携会員、科学技術・学術審議会専門委員、（独）科学技術振興機構評価委員、（独）農業・食品産業技術総合研究機構書類専門委員、（独）日本学術振興会学術システム研究センター専門研究員、同国際事業委員会委員、同科学研究費委員会専門委員などを歴任され、我が国の学術・科学技術の発展に御尽力されました。また、平成二十一年四月より中国浙江大学から Yongqian 主任教授として招聘され、当該大学の研究教育の発展に貢献するとともに、平成二十三年十一月には、かつての指導留学生（現浙江大学教授）と協力して天然有機化合物・ケミカルバイオロジーに関する日中学術会議を開催され、この分野の国際交流にも尽力されました。

この度、先生の逝去から一年という節目を迎えるにあたり、先生の多年にわたるご功績を讃えるとともに、先生の足跡と遺徳を偲ぶことを目的として、左記の様な追悼記念事業を計画いたしました。

つきましては、何卒この趣意にご賛同いただきご協力を賜りますとともに、追悼講演会には万障お繰り合わせの上、ご臨席賜りますようご案内申し上げます。